
『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版 における若干の書誌学的問題

雪 嶋 宏 一

1. はじめに

筆者は1988年以来日本国内に所在するヨーロッパ15世紀活版印刷本いわゆるインクナブラ(インクナビュラ、インクナブラ)の書誌学的調査を継続して行っている⁽¹⁾。調査の過程で判明したことの一つは、国内で最も多数所蔵されているインクナブラはいわゆる『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版(IJL 263; ISTC is00307000)⁽²⁾であるということであり、2000年6月現在13コピーの調査を終えている(後述)。

『ニュルンベルク年代記』は15世紀活版印刷本の傑作であり、さらに印刷文化史上の記念碑的作品であることは我が国においてもつとに知られている。ニュルンベルクの市医であり人文主義者のハルトマン・シェーデル(Schedel, Hartmann, 1440-1514)によってラテン語で著された『年代記の書(Liber chronicarum)』という天地創造から1492年に至るキリスト教的歴史観に立った世界年代記であり、ニュルンベルクの有力者ゼバルト・シュライヤー(Schreyer, Sebald, 1446-1520)とその義兄弟ゼバスティアン・カンマーマイスター(Kammermeister, Sebastian)の出資により、巨匠ミヒャエル・ヴォールゲムート(Wolgemut, Michael, 1434/37-1519)とその師匠の息子で継子となったヴィルヘルム・プライデンヴルフ(Pleydenwurff, Wilhelm, d. 1494)の手になるのべ1809点を超える木版画を含み⁽³⁾、ニュルンベルクの印刷業者アントン・コーベルガー(Koberger, Anton, 1440/45-1513)によって

『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版における若干の書誌学的問題

1493年7月12日にラテン語版が上梓され、ヨーロッパに広く販売された。そして、同時に本書はニュルンベルク市の収入役を務めたゲオルク・アルト(Alt, Georg, 1440/50-1510)によってドイツ語に翻訳され、ラテン語版に改訂を加えたドイツ語版が同年12月23日に同印刷所から刊行され、ドイツ語圏に流布した。本書は挿絵本作品として美術的に優れている点だけでなく、制作に関する契約文書、事前のレイアウト、シェーデル自身のラテン語稿本とラテン語版刊本の手沢本、ドイツ語稿本、さらに決算書といったドキュメントが今日まで残されている書誌学的・印刷文化的な点でも特筆すべき書物である⁽⁴⁾。

筆者は『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の調査の際にその製本順序あるいは折丁構成におおよそ2種類あることに気づいていたが、その点についてこれまで明らかにしてこなかった⁽⁵⁾。ところが、最近、印刷博物館所蔵のコピーを調査した際、ほぼ同時代に行われたと判断できる手書きの折記号を発見したことから、これまでの問題点を整理してみようと考えに至った次第である⁽⁶⁾。

2. 問題の所在

『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版には折記号は印刷されていない。アントン・コーベルガーは1482年以降折記号を印刷するようになり、1486年以降はほとんどの作品に折記号が見られる⁽⁷⁾。ところが、本書ではテキスト本文が始まる第21葉から第319葉まで各葉表のヘッドライン右端にローマ数字でI-CCXCIXのフォリエーションが行われているため、折記号を特に印刷する必要性を感じなかったのかもしれない。しかし、全部で61の折丁からなる全326葉あるいは328葉を丁合し綴じ合わせる場合には何らかの折記号がなければ極めて不便であろう。まして、『ニュルンベルク年代記』は完成後16年を経た1509年に至っても在庫があったことが知られていることから⁽⁸⁾、未製本の折丁を在庫管理する上でも折記号は必要であったはずである。したがって、なんらかの手書きの折記号が振られていたと考

えなければならない。こうした折記号は葉の下端にインクで手書きされていたが、製本の際に裁ち落とされてしまうのが通例である。そのため、現存するコピーで手書きの折記号を全巻にわたって確認できるものは極めて限られているはずである。さらに、『ニュルンベルク年代記』は大冊であり、愛書家に人気の高い書物であったため、後代の所蔵者によって立派に製本し直されたものが多い。そのため、今日でも製本がしっかりしているのどの開きが十分でないものは折記号どころか折丁構成を確認することすらできない場合がしばしばである。

『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版で筆者が気にしている2種類の製本順序あるいは折丁構成とは、前付けの20葉以外にフォリエーション番号が印刷されていない6葉からなる折丁(「ヨーロッパ・サルマティア地方について(De Sarmacia regione Europe)」の章)が、巻末第320葉以降に綴じ込まれている場合と、フォリエーション番号 CCLXVI(第286葉)と CCLXVII(第287葉)の間に綴じ込まれている場合である。後者の状態のコピーは国内の調査でも後述するように少ない割合ではなく、この製本の順序が決して偶発的なものではないことは明らかである。

このような製本順序あるいは折丁構成のヴァリエーションはいついかなる理由で生じたのであろうか。印刷出版に関わったゼバルト・シュライアー、ハルトマン・シェーデル、ミヒャエル・ヴォールゲムート、アントン・コーベルガーらは本来どちらの本文構成を意図していたのであろうか。本稿では、これらの問題点に関して所在調査の過程で判明した点を私見を交えて述べ、今後の研究の方向を探ってみたい。なお、本稿では便宜上、前者の状態を A、後者状態を B、そのいずれでもない状態を C とする。

3. 『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の内容

まず初めに『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の内容を確認してこう。本書は『大英博物館所蔵15世紀刊本目録(以下 BMC と略)』によれば326葉あるいは328葉からなるという⁽⁹⁾。2葉の違いは最終コロフォン(第

320葉裏)の後に白紙2葉が含まれているか否かである。コーベルガーの初期の作品には意味のない白紙葉が含まれており⁽¹⁰⁾、割付と折丁構成の不備によるものと考えられる。やがてそのような不備は改善された。したがって、これら2葉は本来ならば印刷後に切り取られるキャンセル・リーフであろうが、キャンセルされずに2葉が残されたまま製本されたとみなされよう。

以下に、全326葉で上記6葉の折丁が巻末に綴じ込まれている A の状態のラテン語初版に基づいて内容を記述しよう。

1表: 木版レギスター扉: REgistrum || huius ope = || ris libri cro =
|| nicarum || cu(m) figuris et ymagi(ni) = || bus ab inicio mu(n)di.

1裏: 白紙

2表 - 20裏: レギスター

21表 (Folium I) - 26表 (Folium VI): 天地創造 6 日間の御業の梗概

26裏 (Folium VI) - 30裏 (Folium X): 第 1 の時代

31表 (Folium XI) - 41表 (Folium XXI): 第 2 の時代

41裏 (Folium XXI) - 66表 (Folium XLVI): 第 3 の時代

66裏 (Folium XLVI) - 83裏 (Folium LXIII): 第 4 の時代

84表 (Folium LXIII) - 114裏 (Folium XCIII): 第 5 の時代

115表 (Folium XCV) - 281表 (Folium CCLX1): 第 6 の時代

278裏 (Folium CCLVIII): 第 1 コロフォン (1493年 5月23日付)⁽¹¹⁾

279表 (Folium CCLVIII) - 281裏 (Folium CCLXI): ヘッドラインのみ印刷された白紙葉 3 葉

282表 (Folium CCLXII) - 284裏 (Folium CCLXIII): 第 7 の時代

285表 (Folium CCLXV) - 286表 (Folium CCLXVI): 終末の時代

286表: 第 2 コロフォン (1493年 6月 4日付)

286裏: 白紙

287表 (Folium CCLXVII) - 319表 (Folium CCXCIX): 教皇ピウス 2 世 (エネ

ア・シルヴィオ・ピッコローミニ)著「ヨーロッパ」(ヒエロニムス・ミュンツァー編)

287表のヘッドライン：第6の時代

319裏 - 320表：ヨーロッパの地図

320裏：第3コロフォン(1493年7月12日付)

(328葉のコピーではこの後に2葉の白紙葉がある)

321表 - 325裏：ヨーロッパ・サルマティア地方について(De Sarmacia regione Europe)¹²⁾

326：白紙葉

つまり、Bの状態は問題の6葉の折丁の挿入位置が、「終末の時代」が終わった286裏の白紙の後であり、当初シェーデルが予定した本文の末尾に当たり、さらに後述のように折丁構成上でもちょうど折丁の区切りであることから、補遺の挿入位置としては決して偶然ではない。しかし、連続したフォリエーション番号の間に番号のない折丁が挿入されているため製本上の間違いとみなされているが、第3コロフォンに続く位置以外では最も自然な挿入位置ともいえよう。

このような2種類の製本順序については早くから指摘されていた。例えば、ディブディン(Dibdin, Thomas Frognall, 1776-1847)はスペンサー文庫目録第3巻において『ニュルンベルク年代記』の解説の中で、CCLXVIに続いてノンブルのない6葉が来るが、スペンサー文庫本ではそれが巻末の第3コロフォンの後に挿入されていることを指摘して、Bの状態がむしろ普通であるかのように記述した¹³⁾。しかし、BMCでは後述するように“misbound”と注記され、むしろAの状態が書誌学的なアイデアル・コピーとみなされた。ところが、ダニウェイ(Duniway, David Cushing)はBの状態で本文の続きを説明し、「巻末に補遺がある初版のコピーはおそらく製本の誤り、あるいは最初の状態(first state)であろう。なぜなら、ドイツ語版では補遺はフォリエーション(CCLXIII-CCLXVII)に含まれている

からである」という仮説を唱えた¹⁴⁾。つまり、ダニウェイはBを正しい状態とみなし、Aを製本間違いあるいはドイツ語版制作以前の状態と考えた。彼以降この問題に特別な関心を寄せた研究を寡聞にして知らない¹⁵⁾。

4. 『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の折丁構成

次に本書の折丁構成を記述してみよう。本書の折丁構成を調査する場合に現時点で最も参考となる折記号の校合式はBMCである。BMCのIC.7451の書誌記述を見ると、このコピーは326葉であり、その折丁構成が記述されているが、また328葉の校合式も注記されている¹⁶⁾。実際、ベルギーのインキュナブラ全国書誌や『C. フェアファックス・マレイ文庫初期ドイツ書コレクション目録』には328葉からなるコピーの校合式がBMCの注記に基づいて記述されている¹⁷⁾。BMCのIC.7451の校合式は次の通りである。

[* , * * * * * * * * ; a⁶ b-d⁴ e-h⁶ i² k⁴ l-n⁶ o² p q⁶ r-y⁴ z aa-cc⁶ dd² ee⁶ ff⁴ gg-ii⁶ kk² ll⁴ mm-zz A-K⁶ L⁶² M⁶]

この折丁構成はAの状態を示しており、最後の6葉からなる折丁Mが問題の折丁である。また、L⁶²は6葉からなる折丁のうち2葉がキャンセルされていることを表している。ちなみに、328葉のコピーではL⁶となり、校合式の最後はA-M⁶である。

さらに、書誌の注記には“Manuscript quiring, mostly cut away”とあり、手書きの折記号が若干残されていることがわかる。英国図書館貴重書室のJohn Goldfinch氏にe-mailで問い合わせたところ、確かにこのコピーには折記号がいくらか見られ、それらは推定された折記号の一部と一致しているが、製本の際に裁ち落とされているため全容については明らかでないという¹⁸⁾。

ところが、BMCの別のコピーIC.7453の注記には“The collation of the

last quires appears to be ... [K^o L M² N⁶]. ... The last quire has been misbound after quire E (leaf 286), ... ”とあり、最後の折丁構成が異なり、折丁 K に続く L が 2 葉、M が 2 葉、N が 6 葉となっている。同様な折丁構成は天理図書館稀書目録第 4 の本書の書誌記述にも見られる⁽¹⁹⁾。ちなみに、天理本は後述の通り A の状態である。IC.7453は、折丁の L、M ととも IC.7451の組版とは異なるセッティングで印刷されたことになる。ただし、M 1 裏 - 2 表は見開きの木版のヨーロッパ地図であり、IC.7451で行われた L 3 裏 - 4 表と同様である⁽²⁰⁾。しかし、折丁 N は実際には第286葉の次に綴じ込まれているという。この折丁 N が問題の 6 葉の折丁に当たるため、このコピーは B の状態である。しかしながら、このコピーでは第265 - 8葉 (Folium CCXLV-CCXLVIII) が第226葉 (Folium CCVI) の後に綴じ込まれているという明らかな製本ミスがあるため、折丁 N が綴じられている位置が本来のものか後代の改変なのかはにわかに判断し難い。

ここで、かつてヘンリー・ブラッドショー (Bradshaw, Henry, 1831-1886) が提唱し、近年ポール・ニーダム (Needham, Paul) が再発見したよりわかりやすい方法の校合式⁽²¹⁾によって A の状態の折丁構成を改めて記述してみよう。この方式は写本や折記号が印刷されていない初期の印刷本の折丁構成を記述する際に利用され、さらに最近ではオンライン目録で折丁を表記する際にも従来のようにアルファベットと肩付き文字を使用することなく記述することができるため有効であろう。表記の方法は算用数字のみで「折丁 / 折丁を構成する葉」である。例えば「1/1-6」は第 1 番目の折丁は 1 - 6葉からなることを示している。アルファベットで表記する従来の折記号の方法では何番目の折丁であることが一目では判然とせず、また人によって前付けの折丁をどのように表記し、小文字 z の後はどのような記号を用いるかという点で違いがでることがあるため、共通性にも劣っている。

この折丁構成と印刷博物館のコピー (A の状態) で筆者が実見した折記号を対応させてみよう (表 1)。印刷博物館のコピーの折記号は葉の下端ではなく、各葉表の版面右端直下にインクで書き込まれたため製本の際に切り

取られてはいないが、19世紀に製本し直す際、紙葉の汚れを落とすためにおそら全体を薬品で洗った結果、手書き文字のインクまで薄くなってしまい、折記号の判読が相当困難になった。したがって、不明瞭な点も多いが判読できた箇所についてのみ記述した。

印刷博物館所蔵の折記号の振り方は、例えば 6 葉からなる折丁 GG (56/1-6) の場合には、第 1 葉目には折記号は見えないが、第 2 葉目と第 3 葉目は伝統的に「GGij」と「GGij」となり、第 4 葉目では記号なしで「4」とのみ記されている (図 1 - 6)。第 1 葉目に折記号が記されていない理由は定かでないが、第 4 葉目で記号を明記せずに番号のみを記入した理由は、そこが折丁の後半に当たり、同じシートに印刷された第 3 葉の表にすでに折記号が記されているため、あえて記す必要がないからであろう。同様な記号の振り方は折丁 f (9/1-6) でもはっきりと見ることができる。印刷博物館所蔵本ではこのようなシステムで折記号が全体にわたって手書きされていたと考えられる。

表 1 で明らかなように折記号は小文字の記号については BMC, IC.7451 の折記号とほぼ一致し、大文字の記号は大文字 2 字によって記されているようであるが、だいたい対応しているといえよう。ただし、問題の最後の折丁の記号は明確ではないが M でないことは確かである。ところが、53番目の折記号がおそらく DD であり、56番目が GG であるため、このコピーでは54番目と55番目の折丁の間に最後の61番目の折丁が挿入される可能性はないと考えられ、BMC, IC.7451の折記号の推定と矛盾していないことになる。

5. 『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の所蔵状況

これまでの研究者は『ニュルンベルク年代記』ドイツ語初版に対応した B の状態を通常の姿と考えているようだが、BMC や印刷博物館のコピーのように同時代の手書きの折記号が記された A の状態がラテン語初版の本来の姿を留めていると言えるのだろうか。現存するコピーではどちらの

表1 『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の折丁構成

葉番号	フォリエーション	ブラッドショー式折記号	BMC 折記号	印刷博物館コピー折記号
1-6		1/1-6	* 1-6	
7-12		2/1-6	** 1-6	
13-20		3/1-8	*** 1-8	
21-26	I-VI	4/1-6	a 1-6	
27-30	VII-X	5/1-4	b 1-4	
31-34	XI-XIIII	6/1-4	c 1-4	
35-38	XV-XVIII	7/1-4	d 1-4	
39-44	XIX-XXIIII	8/1-6	e 1-4	
45-50	XXV-XXX	9/1-6	f 1-6	f
51-56	XXXI-XXXVI	10/1-6	g 1-6	g
57-62	XXXVII-XLII	11/1-6	h 1-6	h
63-64	XLIII-XLIIII	12/1-2	i 1-2	i
65-68	XLV-XLVIII	13/1-4	k 1-4	
69-74	XLIX-LIIII	14/1-6	l 1-6	l
75-80	LV-LX	15/1-6	m 1-6	m
81-86	LXI-LXVI	16/1-6	n 1-6	n
87-88	LXVII-LXVIII	17/1-2	o 1-2	o
89-94	LXIX-LXXIV	18/1-6	p 1-6	p
95-100	LXXV-LXXX	19/1-6	q 1-6	q
101-104	LXXXI-LXXXIIII	20/1-4	r 1-4	r
105-108	LXXXV-LXXXVIII	21/1-4	s 1-4	s
109-112	LXXXIX-XCII	22/1-4	t 1-4	t
113-116	XCIII-XCVI	23/1-4	u 1-4	
117-120	XCVII-C	24/1-4	x 1-4	
121-124	CI-CIV	25/1-4	y 1-4	
125-130	CV-CX	26/1-6	z 1-6	
131-136	CXI-CXVI	27/1-6	aa 1-6	
137-142	CXVII-CXXII	28/1-6	bb 1-6	
143-148	CXXIII-CXXVIII	29/1-6	cc 1-6	
149-150	CXXIX-CXXX	30/1-2	dd 1-2	

151-156	CXXXI-CXXXVI	31/1-6	ee 1-6	
157-160	CXXXVII-CXL	32/1-4	ff 1-4	
161-166	CXLI-CXLVI	33/1-6	gg 1-6	gg
167-172	CXLVII-CLII	34/1-6	hh 1-6	hh
173-178	CLIII-CLVIII	35/1-6	ii 1-6	
179-180	CLIX-CLX	36/1-2	kk 1-2	
181-184	CLXI-CLXIIII	37/1-4	ll 1-4	ll
185-190	CLXV-CLXX	38/1-6	mm 1-6	
191-196	CLXXI-CLXXVI	39/1-6	nn 1-6	
197-202	CLXXVII-CLXXXII	40/1-6	oo 1-6	
203-208	CLXXXIII-CLXXXVIII	41/1-6	pp 1-6	
209-214	CLXXXIX-CXCIIII	42/1-6	qq 1-6	
215-220	CXCV-CC	43/1-6	rr 1-6	
221-226	CCI-CCVI	44/1-6	ss 1-6	ss
227-232	CCVII-CCXII	45/1-6	tt 1-6	tt
233-238	CCXIII-CCXVIII	46/1-6	uu 1-6	
239-244	CCXIX-CCXXIV	47/1-6	xx 1-6	xx
245-250	CCXXV-CCXXX	48/1-6	yy 1-6	
251-256	CCXXXI-CCXXXVI	49/1-6	zz 1-6	zz
257-262	CCXXXVII-CCXLII	50/1-6	A 1-6	
263-268	CCXLIII-CCXLVIII	51/1-6	B 1-6	
269-274	CCXLIX-CCLIV	52/1-6	C 1-6	
275-280	CCLV-CCLX	53/1-6	D 1-6	DD
281-286	CCLXI-CCLXVI	54/1-6	E 1-6	
287-292	CCLXVII-CCLXXII	55/1-6	F 1-6	
293-298	CCLXXIII-CCLXXVIII	56/1-6	G 1-6	GG
299-304	CCLXXIX-CCLXXXIV	57/1-6	H 1-6	
305-310	CCLXXXV-CCXC	58/1-6	I 1-6	
311-316	CCXCI-CCXCVI	59/1-6	K 1-6	
317-320	CCXVII-CCXCIX	60/1-6(-2)	L 1-6(-2)	
321-326		61/1-6	M 1-6	(?)

328葉コピー : 317-322, CCXCVII-CCXCIX, 60/1-6, L 1-6
L² M² N⁶ コピー : 317-318, CCXCVII-CCXCVIII, 60/1-2, L 1-2; 319-320, CCXCIX, 61/1-2, M 1-2.

状態が優勢であろうか。

『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版はインキュナブラの中では最も多数現存するものの一つであり、現存部数から推定して1500部も印刷されたと考えられている⁽²²⁾。英国図書館が構築しているインキュナブラの世界的データベース ISTC (Incunabula Short Title Catalogue) には1997年の時点で英国120、アメリカ合衆国208、ベルギー32、フランス54、ドイツ68、イタリア・ヴァティカン133、オランダ24、スペイン・ポルトガル44、その他ヨーロッパ25、日本11、日本以外のその他諸国21の合計740コピーの所蔵が登録されている⁽²³⁾。ちなみに、前記のように日本の所蔵は13コピーに増加している。これら以外にも未調査の図書館や個人コレクション、さらには古書店の在庫が少なくないことを考慮すればウィルソンが推定した現存部数800コピーという概数はおおよそ実態を示しているといえよう⁽²⁴⁾。これだけ大量のコピーをもれなく調査することは1個人の力では到底不可能であることは自明である。したがって、筆者が調査した国内所蔵分と、近年刊行された蔵書目録で状態が判断できるものを以下に列挙してみよう。

日本 13 (A=6, B=7)

大阪：(株)モリサワ B

京都：京都外国語大学図書館 B

吹田：関西大学図書館 A

天理：天理大学附属天理図書館 A

東京：印刷博物館 A

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫(コルディエ文庫) 2部 いずれも B

東京大学附属図書館(亀井文庫) A

ミズノプリンティングミュージアム A

早稲田大学図書館 B

東大阪：近畿大学中央図書館 B

日野：明星大学図書館 B

広島：広島経済大学図書館 A

フランス

Ile-de-France: Bibliothèque du Saulchoir B⁽²⁵⁾

Paris: Bibliothèque Mazarine, Inc 719 B⁽²⁶⁾

Paris: La Bibliothèque Nationale de France 12 (A=3, B=7, C=2)⁽²⁷⁾

Rés. G. 227 B

Rés. G. 228 B

Rés. G. 498 “dernier cahier non chiffré, dont il manque les 3e, 4e et 6e ff., inséré entre les ff. CCLX et CCLXI” C

Rés. G. 499 B

Rés. G. 500 A

Rés. G. 501 A

Rés. G. 502 B

Rés. G. 612 “dernier cahier non chiffré inséré entre les ff. CCLX et CCLXI” C

Rés. G. 737 A

Rés. Smith-Lesouëf 39 B

Cartes et Plans, Rés. Ge.DD. 1366 B

Soc. de géogr., Rés. Bon. fol.N 2 B

英国

London: The British Library 4 (A=3, B=1)⁽²⁸⁾

IC.7451 (MS signatures) A

IC.7452 A

IC.7453 B

IC.7454 A

Oxford: All Souls College Library, L.R.5.k.7. A⁽²⁹⁾

アメリカ合衆国

Cambridge, Mass.: Harvard University Library 7 (A=4, B=3)⁽³⁰⁾

726 A

727 A

728 A

729 B

730 B

731 A

732 B

以上のように極めてわずかな例であるが、AとBはどちらが優勢というわけではなく併存しているが、フランスではBが多く、イギリスではAが多い傾向があるかもしれない。後世に輸入されたアメリカと日本に所在するコピーはA、Bともに見られる。こうして、BMCのようにBをもはや“misbound”と言うことはできない。実際、La Bibliothèque Nationale de FranceやHarvard University Libraryの目録ではBについては最後の6葉がCCLXVIとCCLXVIIの間に綴じられているとのみ説明している。また、デニス・E・ローズはオックスフォード大学の目録の中で、「普通CCLXVIとCCLXVIIの間に見られるノンブルのない6葉がこのコピーでは巻末に綴じられている」と記して、Bの状態がより一般的であることを示唆している⁽³¹⁾。しかし、残念ながらこの目録ではAll Souls College Library以外のコピーがすべてBであるかどうかは明記されていない。

一方、製本についてであるが、明らかに同時代の製本を保持していることが明らかなのは上記の中では、Harvard University Library 726だけであり、続いては、Harvard University Library, 730が16世紀の豚革装丁である。ところが、我が国に所在するコピーのいずれもが刊行当時の製本状態を確

かに留めているとは言えない。今後、国外のコピーの製本時期、製本の状態、手書きの折記号を調査することによってこれらの問題の糸口が見つかるかもしれない。特に、印刷国ドイツに所在するコピーについては十分調査する必要があるだろう。

6. シェーデルのラテン語稿本の状態

海外での現物調査を経ていない現時点では国外で所蔵される多数の『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の状態を正確に把握することは容易ではない。ところが、最近印刷博物館がラテン語版稿本全巻のカラーポジフィルムをニュルンベルク市立図書館から入手したため、シェーデル自身がラテン語で記述した年代記の稿本の状態を同博物館のご厚意で確認することができた。それについて以下に述べておこう。

年代記のラテン語とドイツ語の両稿本はニュルンベルク市立図書館に保存されている。かつてエイドリアン・ウィルソン(Willson, Adrian, 1923-1988)が『ニュルンベルク年代記の誕生』の中で詳述し、ラテン語稿本と印刷本初版との比較を行ったが⁽³²⁾、本稿で問題にしている点については触れなかった。また、現在バイエルン州立図書館に所蔵されているシェーデル旧蔵のラテン語初版の手沢本についてもウィルソンは言及しているが⁽³³⁾、やはりこの点については触れていない。

ラテン語版稿本の製本はクォーターレザーで板表紙が綴じ付けられており、ニュルンベルクのコーベルガーの工房で同時代に行われたものと思われる。しかしながら、第1葉表にはゲオルク・アルトが行ったドイツ語への翻訳とドイツ語版刊行の次第がラテン語で記述されて、1493年12月23日のドイツ語初版刊行の日付が明記されているため、この製本はその日付以降であることは明らかであろう。ところが、印刷本巻頭に見られるレジスターの扉にあたる原稿もレイアウトもなく、第6葉表から第20葉裏までがラテン語版の第2葉表から第20葉裏までのレジスター部分の原稿となり、印刷本とかなり異なっている。第21葉表以降は若干順不同な部分がある

が、概ね印刷本の本文の続きと一致している。フォリエーションも全く同様であり、ヘッドラインのみが印刷された CCLIX 表 - CCLXI 裏の 3 葉の白紙葉も稿本通りに印刷されていた。しかしながら、CCLXIII 表の「死者の舞踏」の部分では本文と木版とのレイアウトが異なり、さらに下方には印刷本の CCLXIII 裏に印刷された本文が書かれていた。そのため、続く「終末の時代」は稿本では CCLXIII 裏から始まり CCLXV 裏で終わり、CCLXVI は白紙葉となっている。そして、それに続いてフォリエーションが記されていない「ヨーロッパ・サルマティア地方」の本文が、木版画のレイアウトに大きな違いが見られるが、B の状態と同様に置かれていた。その後に再び CCLXVII がヘッドラインに記入された「ヨーロッパ」の章が続いている。この稿本には印刷本巻末のヨーロッパの地図のレイアウトもコロフォンにあたる文章もない。したがって、「ヨーロッパ・サルマティア地方」の本文が A の状態のように巻末に置かれる蓋然性は小さいといえよう。もし、この稿本の順序がシェーデルの意図したものであればラテン語初版の本来の状態はダニウエイの仮説の通り B でなければならない。

7. ドイツ語初版の状態

それではドイツ語初版はどうであろうか。ドイツ語版は上記のようにゲオルク・アルトによってラテン語版稿本からドイツ語訳されて稿本が作られ、それに基づいて印刷本が制作された。ドイツ語版稿本はレイアウトなどの指示についてはラテン語稿本に比べて随分簡略化しているという³⁴⁾。ドイツ語初版はラテン語初版とは構成がいくらかことになっている。まず、巻頭のレジスターが木版の標題紙を含めても10葉からなり、ラテン語初版の CCLIX 表 - CCLXI 裏の 3 葉の白紙葉はない。そして、ドイツ語初版では CCLXI 裏から CCLXII 裏までが「終末の時代」となり、CCLXIII 表から CCLXVII 表までが“ Von der gegent Europe Sarmacia oder Pol(e)n gena(n)t ”、つまりラテン語版の「ヨーロッパ・サルマティア地方」にあたる。CCLXIII 表以降のヘッドラインにはフォリエーションのみが印刷され、ラ

テン語版 CCLXVII 表にあるようなランニング・タイトルは印刷されていない。そして、CCLXVII 裏から CCLXXXVI 表にエネア・シルヴィオ・ピッコローミニの「ヨーロッパ」が置かれている。この部分ではラテン語版にあったイタリアの記述が省略されている。続く見開きでヨーロッパの地図が展開され、巻末に1493年12月23日の日付が記入されたコロフォンが印刷されている。全部で297あるいは298葉からなる。1葉の差は最後から2番目の折丁に白紙葉が含まれるかどうかである。こうして、ドイツ語初版はラテン語版の B の状態あるいはラテン語版稿本と同様な順序になっているといえよう。このような点を考慮すると、ドイツ語初版はラテン語版の不備を改訂して、著者あるいは出版側の意図を明確に反映させたと考えられないだろうか。

実際、このようなラテン語版における不備がドイツ語版で修正されている箇所は他にも見られる。例えば、ラテン語版の XXI 裏では本文が納まりきらなかったため、残りを XXII 表の左下方のスペースに押し込めているが、ドイツ語版では同じ箇所は修正されて、本文が XXI 裏に納まっている。また、ラテン語版の XXXVIII 表では本文は 2 段組であるが、ページ内に納まりきらず、XXXVIII 裏に渡っていたが、ドイツ語版では本文は XXXVIII 表にすっぽりと納まっているのである。その他、フォリエーションの誤植も訂正されている。つまり、ラテン語初版では著者と印刷者との意図のずれ、あるいは印刷作業上の問題から生じたずれが反映されたため、ドイツ語版でそれが訂正されたとみなされよう。

8. 『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の印刷順序

西洋の活版印刷本はゲーテンベルクの初めから決して本文の続きの順序通りに印刷されてきたわけではない³⁵⁾。それは、印刷機の台数、文選工などの職人の人数、印刷原稿の仕上がり事情など様々な要因によるものであるが、目的は印刷機と職人を遊ばせることなくフル回転させて効率よい分業によって生産性を上げることであった。アントン・コーベルガーは24台

の印刷機と100人の職人を抱えた15世紀ヨーロッパ最大の印刷工場を運営していた³⁶⁾。

『ニュルンベルク年代記』ラテン語版の印刷の時期には、版木を共通して使い合ったドイツ語版の印刷作業も並行して行われ、さらに、その時期も他の書物の印刷作業は通常通り続けられていた³⁷⁾。つまり、印刷工場ではいくつもの作業が同時に進行していたのであるから、本書の印刷に何人の職人を割り当て、何台の印刷機を使用するか、あるいはどのような順序で印刷するかはコーベルガーにとってかなり大きな問題であったはずである。しかしながら、『ニュルンベルク年代記』ラテン語版の印刷順序についてはこれまで十分に研究されてはいないのである。

そこで、『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の印刷順序について考えてみよう。『ニュルンベルク年代記』の制作に関しては、出資者と画家との1491年12月29日付けの契約書と、出資者と印刷業者との1492年3月16日の契約書がニュルンベルク市立公文書館に保存されている。そのため、制作作業がいつどのようにして開始されたのかをある程度知ることができる。つまり、アントン・コーベルガーは1492年3月16日以降に印刷作業を始めて1493年7月12日にラテン語初版を完成したのであるから、ラテン語初版の印刷には最長で約1年4ヶ月を要したことになる。印刷作業に入る前にまずヴォールゲムートらが挿絵と本文のレイアウトを決めると、シェーデルがレイアウトに従って文章を執筆した。執筆が終わった折丁ごとに印刷所に渡され、準備された版木と活字が組み合わされて組版が作られたと考えられている³⁸⁾。

上記のようにラテン語初版の巻頭の第2 - 20葉はレギスターである。アルファベット順に配列された項目と言及箇所の一覧番号からなる。フォリエーションのない「ヨーロッパ・サルマティア地方」については当然項目が取り上げられていない。また、上記のように稿本ではこの部分は15葉であるため、本文の割付が大幅に変更されている。したがって、レギスターは本文全体の割付が確定した後に最後に項目が整理され割付が

調整されて印刷に付されたことになる。

次に、ラテン語初版には3箇所にもフォリエーションがある。「第6の時代」の終わりに当たる第279葉裏の1493年5月23日、「終末の時代」の末尾の第286葉表の同年6月4日、「ヨーロッパ」の末尾に当たる第320葉裏の同年7月12日である。一方、稿本には前2箇所と、さらに「ヨーロッパ」の原稿が同年4月4日に出来上がったことを記す日付がある。つまり、「第6の時代」の原稿以前に付録部分のヒエロニムス・ミュンツァーが編集した「ヨーロッパ」が先に出来上がっていたことになる。しかしながら、ミュンツァーが書いた原稿には判読が困難な箇所があったため、印刷工場内で写字生によって書き直されている³⁹⁾。ところで、「終末の時代」の印刷が終わった時点(6月4日以降)で、シェーデルによる「ヨーロッパ・サルマティア地方」の原稿はできあがっていたのだろうか。おそらく、準備が整わなかったため、原稿がすでにあつた「ヨーロッパ」の印刷に先に着手することになったのではないか。そのため、「ヨーロッパ」の部は「終末の時代」のフォリエーションを引き継いだのではないか。おそらく、原稿が遅くなってしまった「ヨーロッパ・サルマティア地方」にフォリエーションが行われなかったのは、シェーデルが本来「ヨーロッパ・サルマティア地方」を「ヨーロッパ」の前に入れるつもりであったからであろう。つまり、「ヨーロッパ・サルマティア地方」の印刷はレギスターと同様に最後の段階で行われたと考えられよう。

9. まとめ

以上、『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版に見られる製本順序の2種類のヴァリエーションについて詳しく述べてきたが、ラテン語稿本とドイツ語初版と比較すると、これまで製本ミスとみなされていたようなBの状態は偶然的なものではなく、執筆者シェーデル側の意図が反映されたものであると考えることができよう。そのため、『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版は本来Bの状態で製本されるべきであったが、それを指示する折記

号が印刷されずに印刷職人によって手書きされたため、ある部分は A の状態としてフォリエーションの続きで製本されるように折記号を指示したのではなからうか。しかしながら、上述のダニウエイが述べるように A の状態を書誌学的に first state と言えるかどうかは定かではない。また、『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版はヨーロッパ各地のコーベルガーの代理人に送られて販売されたため、ニュルンベルクで製本された場合と各地で独自に製本された場合では折丁構成の解釈が異なり、このような 2 種類の状態が生じることになったのではなからうか。

インキュナブラを研究する場合、ある完全コピーをアイデアル・コピーとみなし、その状態を手本にして書誌を作成し、それぞれのコピーをこの書誌と比較することで版を同定したり、印刷ヴァリエーションや異版などを見つけて出すことは極めて重要な作業である。これまで、『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版は BMC に基づいて A の状態を一応のアイデアル・コピーとしてきたが、以上のように考えると一体どちらをアイデアル・コピーと考えるべきであろうか。それによって折記号の校合式も若干異なってくる。現時点では筆者は執筆側側の意図が反映された B の状態をアイデアル・コピーとするべきではないかと考えている。

しかし、今後さらに同時代の製本とりわけコーベルガーの工場で行われた製本を保存しているコピーや、手書きの折記号が見られるコピーを精密に調査することによってこの問題はさらに検討されるべきであろう。また、上記のように本書は複雑な折丁構成をもっているが、このような構成に至った理由を詳しく検討することも必要であろう。それによって、本書の印刷順序や使用された印刷機の台数や文選工の人数、ある時期並行して印刷作業が行われたラテン語版とドイツ語版の印刷工程などの問題を解明する糸口が見出されるかもしれない。

付記：これまで『ニュルンベルク年代記』を調査させて頂きました上記の日本国内の図書館・博物館・個人蔵書家の方々に末尾ながら衷心より御礼申し上げます。次第です。

注

- (1) 拙著『本邦所在インキュナブラ目録』、雄松堂出版、1995.10
- (2) 同書、p.93. ISTC は英国図書館が構築するインキュナブラの世界的データベースであり、『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版の番号は is00307000 である。
- (3) ダニウエイは木版画総数を 1817 と数えている。Duniway, David Cushing. A study of the Nuremberg Chronicle, *Publications of the Bibliographical society of America*, 35, 1941, p. 28.
- (4) A. ウィルソン著、河合忠信・雪嶋宏一・佐川美智子訳『ニュルンベルク年代記の誕生』、雄松堂出版、1993.6 参照
- (5) 筆者は早稲田大学図書館所蔵のインキュナブラ目録を作成した際、早稲田コピーの書誌記述の注記に“ Leaves 321-325 interpolated between 286 and 287 (Folium CCLVI and CCLXVII)” と記述したが、現在では“ interpolated ”の表現はこの場合には不正確であり“ inserted ”がより適切であると考えている。
- (6) 本書の調査に際して印刷博物館に大変お世話になりました。感謝の意を表する次第です。
- (7) コーベルガーが折記号を印刷した初期の作品は CLEMENS V. Constitutiones cum apparatu Joannis Andreae. 15 January 1482. であると思われる (British Museum. *Catalogue of books printed in the XVth century now in the British Museum* (以下 BMC と略), pt. II, reproduced ed. London, 1963, pp. 421)
- (8) A. ウィルソン、前掲書 pp. 229-233 参照。
- (9) BMC, pt. II, p. 437.
- (10) 例えば、コーベルガーが 1473 年 7 月 24 日に刊行した Boethius, *De consolazione philosophiae* は全 200 葉であるが、そのうち第 1, 7, 82, 98-101, 166, 200 葉が白紙葉である (cf.: BMC, pt. II, p. 412)
- (11) ウィルソンはこの日付を誤って 6 月 10 日とした (ウィルソン、前掲書、p.156-158)。その理由はコロフォンで使われているラテン語の“ kal(end)as ”の意味を理解しなかったからに違いない。このコロフォンの場合の“ x. kal(end)as. Iunias. ”という表現は、「6 月 1 日から 10 日を引いた日」すなわち 5 月 23 日を意味している。しかしながら、拙訳においてこの誤りを指摘できなかったのは筆者の不勉強故である。遅ればせながらこの場を借りて注記しておきたい。
- (12) 「ヨーロッパ・サルマティア地方」とは当時のポーランドを指す名称で、今日のドイツ北部とポーランドにあたるクラクフ、リューベック、ナイセについて記述されている。ラテン語・ドイツ語ともに Sarmacia (サルマキア、サルマツィア) と綴られているが、もともとは古代に黒海北岸地方から東ヨーロッパを指した名称である Sarmatia Europea から派生した地名であると思われる。したがって、本

稿では「サルマティア」とした。

- (13) Dibdin, Thomas Frognall. *Bibliotheca Speceriana : a descriptive catalogue of the books printed in the fifteenth century, and of many valuable first editions, in the library of George John Earl Spencer*, vol. III, London, 1814, pp. 257 & 278.
- (14) Duniway, ob. cit., p. 22.
- (15) 例えば、ウィルソンは「白紙3葉に続いて印刷された『サルマティア補遺』はバルト海周辺と思われる水辺の風景で始まる。」(ウィルソン、前掲書、p.161、キャプション)と記述しており、Bの状態を前提として述べている。
- (16) BMC, pt. II, p. 437, IC. 7451.
- (17) Polain, Louis. *Catalogue des livres imprimés au quinzième siècle des bibliothèques de Belgique*, t. 3, Bruxelles, 1978 (réimpression de l'édition originale de 1932), p. 681; *Catalogue of a collection of early German books in the Library of C. Fairfax Murray*, vol. 2, London, 1962 (reprint ed.), p. 633.
- (18) 筆者の質問に対して、ゴールドフィンチ氏は6月3日付けのe-mailで次のように回答している。
- There are manuscript signatures in one of our copies, IC.7451. Many have been cut away and so can't be seen. But the ones I have looked at seem to fit with the collation in BMC. I haven't looked at them all.
- (19) 天理大学附属天理図書館『天理図書館稀書目録洋書の部第4』、天理、1989(天理図書館叢書第41輯) no.396.
- (20) 印刷博物館のコピーではこの箇所が後代に綴じ直されている。見開きのヨーロッパ地図が十分に開くようにのどの部分にあしが補足され、そのあしが前2葉の折丁と一しょに綴じられている。
- (21) Needham, Paul. *The Bradshaw method : Henry Bradshaw's contribution to bibliography*, Chapel Hill, 1988 (The seventh Hanes Lecture).
- (22) ウィルソン、前掲書、p.45.
- (23) *The illustrated ISTC on CD-ROM*, Reading, c1997.
- (24) ウィルソン、前掲書、p.240.
- (25) *Catalogue régionaux des incunables des bibliothèques publiques de France*, vol. VIII, nouvelle édition revue et corrigée par Béatrix de Buffévent, Paris, 1993, 466.
- (26) *Catalogue régionaux des incunables des bibliothèques publiques de France*, vol. VI: Bibliothèque Mazarine, par Denise Hillard, Paris, 1989, 1814.
- (27) Bibliothèque Nationale. *Catalogue des incunables*, t. II, fasc. 4, Paris, 1985, S-161.

- (28) BMC, pt. II, p. 437.
- (29) Rhodes, Dennis E. *A catalogue of incunabula in all the libraries of Oxford University outside the Bodleian Library*, Oxford, 1982, 1595.
- (30) Walsh, James E. *A catalogue of the fifteenth-century printed books in the Harvard University Library*, vol. I, Binghamton, New York, 1991 (Medieval & Renaissance texts & studies ; vol. 84), 726-732.
- (31) Rhodes, ob. cit., 1595 (b).
- (32) ウィルソン、前掲書、pp.55-162.
- (33) ウィルソン、前掲書、pp.207-227.
- (34) ウィルソン、前掲書、pp.165.
- (35) 例えば、ゲーテンベルクは「42行聖書」を6台の印刷機を使用し、10のセクションに分割して印刷したとみなされている(高宮利行『ゲーテンベルクの謎：活字メディアの誕生とその後』岩波書店、1998.12、pp.95-96参照)。また、論争的となったマインツで1469年頃に印刷されたとみなされている Johannes Bulbus, *Catholicon* はフォリオ判373葉の大冊であるが、その印刷は65 - 189葉と1 - 64葉、そして190 - 373葉の2分割されて2台の印刷機で並行して印刷されたと考えられている(拙稿「カトリコン・プレス論争の行方」『印刷史研究』第4号、1997.4、p.24参照)。
- (36) ウィルソン、前掲書、p.176.
- (37) コーベルガーと出資者らとの間で結ばれた1492年3月16日の契約からラテン語初版が完成する1493年7月12日までに、コーベルガーの工場からは印刷完成年月日が明確なものだけでも9点が刊行され、さらにそれ以降ドイツ語初版が完成した1493年12月23日までに3点(うち1点はドイツ語初版完成と同日)が刊行されている(Burger, Konrad. The printers and publishers of the XV. century with lists of their works: index to the supplement to Hain's Repertorium bibliographicum, etc., In: Copinger, W. A. *Supplement to Hain's Repertorium bibliographicum*, vol. 2, London, 1902, p. 455)。
- (38) ウィルソン、前掲書、p.182.
- (39) 同書、p.182.

(ゆきしま・こういち 図書課)

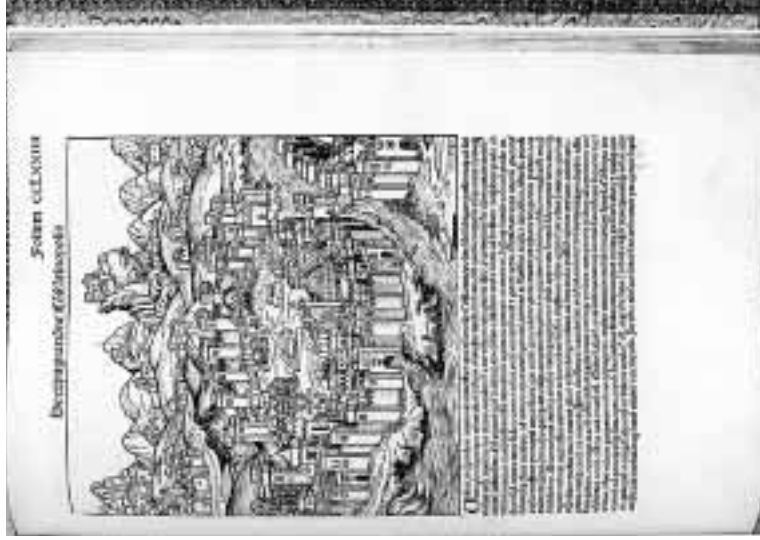


図1 印刷博物館所蔵本294葉表

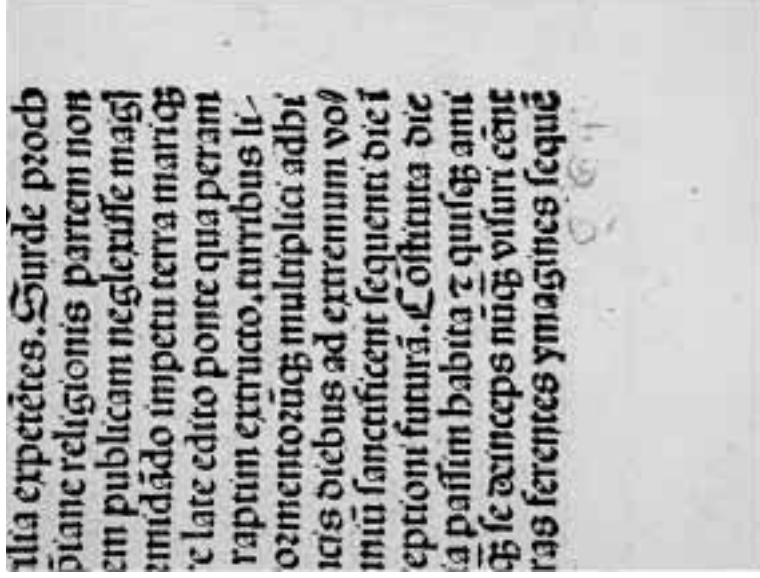


図2 同 294葉表右下欄外の手書き折記号 GGij

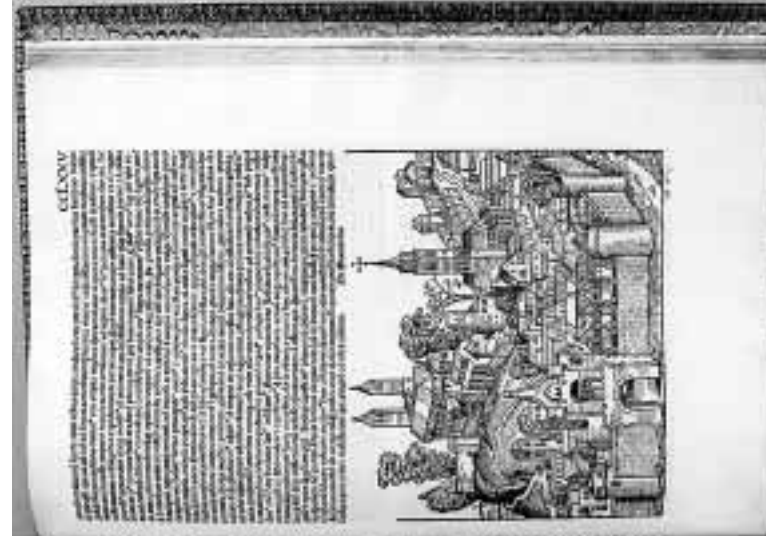


図3 同 295葉表



図4 同 295葉表右下欄外の手書き折記号 GGijj

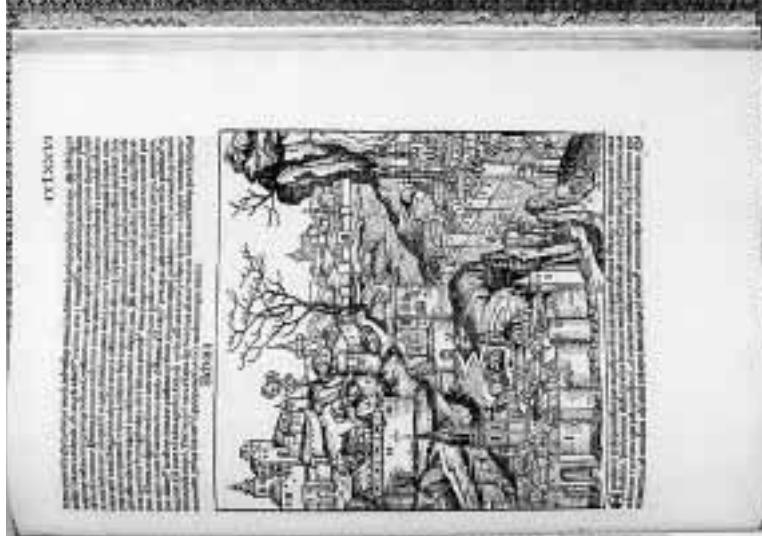


図5 同 296葉表

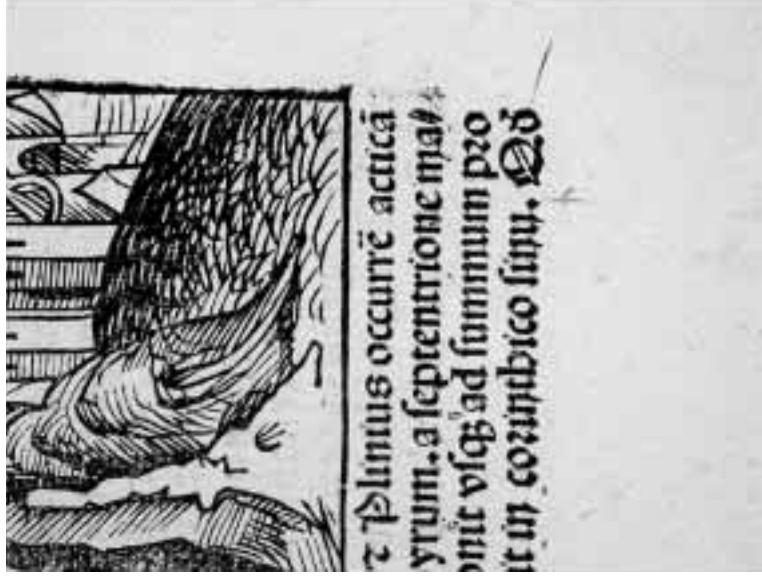


図6 同 296葉表右下欄外の手書き折記号4